

豊中市千里地域の魅力

話し手：太田博一

千里グッズの会事務局長、一級建築士

インタビューにあたって

豊中市の千里ニュータウンでは近年になって集合住宅の建替えが進み、子育て世帯の流入も進んでいる。しかし、急速に進むまちの更新は、景観やコミュニティの維持といった面で様々な問題を引き起こす可能性もある。住区の拠点として暮らしを支えてきた近隣センターを、どのように活性化していくかも課題だろう。

豊中市ならびに千里ニュータウンが今後も「住みたいまち」あるいは「住み続けたいまち」としての評価を獲得するためには、どのような視点が必要になるのだろうか。千里ニュータウン研究・情報センターや千里グッズの会に携わり、また、住民ならびに建築士として千里ニュータウンを長年見続けてきた太田博一さんにお話を伺った。

活動のきっかけ

新千里東町は2000年に、国の「歩いて暮らせる街づくり構想事業」に採択されました。この事業では、地域の方たちがまちを点検し、ワークショップを行って、新千里東町を暮らしやすいまちにしていくためにはどのような工夫が必要かということを検討し、7つの提案にまとめました。その中の一つに、「近隣センターに地域のみんなが交流できる場所をつくろう」という提案があり、これを実践するために豊中市の支援のもとで空き店舗を活用した社会実験が行われることになりました。新千里東町の住民を

対象に実行委員の募集が行われて、2001年9月に交流の場の運営に向けての委員会がスタート。委員会での検討の結果、コミュニティカフェを立ち上げることになり、9月末には「ひがしまち街角広場」がオープンしました。2002年2月で社会実験は終わり、3月からは自主運営となり、現在に至っています。

私は知り合いの方に勧められて実行委員になって街角広場の立ち上げに参加し、それ以来活動に関わっています。

「歩いて暮らせるまちづくり構想事業」の構想づくりや街角広場の立ち上げには大阪大学の先生に関わっていただいていたので、街角

広場は先生や学生と住民との交流の場にもなりました。2002年は千里ニュータウンまちびらき40周年ということもあり、この機会に大学研究室と住民が協力して千里のお土産物をつくろうということになり、「千里グッズの会」が誕生しました。千里のグッズをいろいろと検討しましたが、「魅力ある街には魅力的な絵葉書がある」という思いと、手軽に作成できるということから千里絵葉書づくりが始まりました。

この絵葉書は街角広場で常時展示・販売していますが、千里の地域イベントでも千里グッズの会のコーナーを出させていただいて販売しています。これまで撮りためてきた写真を使った絵葉書は850種類ぐらいありますが、常時販売しているのは50種類ぐらいです。絵葉書を買っていただく方の中には、遠くに住んでおられる息子さんに送るといった女性の方がおられたり、転勤で千里ニュータウンに住むことになったので、以前住んでいた地方の友達に、こんなところに住んでいますよと知らせるのにちょうどいいと言ってくれる方もいます。また、私は福岡市出身で、福岡のまちづくりに関わっていますが、ときどき千里ニュータウンに住んでおら

れた方にお会いします。そういう方に絵葉書をプレゼントしますと、懐かしいといって喜んでくれます。このように千里絵葉書は、交流や地域紹介のための手軽な手段として活躍しています。

千里の風景の変化

絵葉書づくりをやっていると、この10年ほどの間に急激に千里ニュータウンの風景が変わってきたことに気づかされます。10年前の絵葉書の写真の場所に行くと、写真に写っている建物がなくなって新たな建物が建っていることがよくあります。このようなことから、千里絵葉書は昔を知らない新たな住民の方たちにかつての千里の姿を教えてください、長く住んでおられる方には暮らしの記憶を呼び覚ましてくれます。千里絵葉書は、千里ニュータウンの歴史や暮らしの物語を伝えるアーカイブでもあります。

この10数年間の風景の急激な変化は、集合住宅の建替えが短期間に集中したためで、建替えは現在も進行中です。1990年代に府営住宅の一部が建替えられたり社宅の建替えもありましたが、まだまだ数は少なく建替えのスピードも徐々にという感じでした。しかし、2000年頃から大阪府住宅供給公社や旧住宅公団（現UR都市再生機構）が建設した分譲住宅が建替わり始めて、2007年頃からは府公社の賃貸住宅、2010年頃からは府営住宅の建替えが始まり、現在も続いています。たぶん初期に建設された集合住宅のうち、社宅や分譲住宅の7～8割ぐらいと賃貸住宅の半数以上がすでに建替わっているか工事中だと思います。



太田博一さんと「ひがしまち街角広場」

このような集合住宅の建替え、高層化によって、千里ニュータウンの景観の全体構造も大きく変わってきました。当初は駅の周辺に高層住宅があって、少し離れると4～5階建ての中層住宅があり、その外側に戸建て住宅がある。駅や地区センターから次第に低くなるスカイライン（建物群が描く輪郭線）によって千里ニュータウンの骨格となる景観がつくられていました。また、千里ニュータウンの玄関に当たるところ、たとえば桃山台駅や南千里駅の周辺にはデザインを工夫した高層住宅を配置して、千里ニュータウンのゲートを表す景観づくりがなされていました。このように、ニュータウン全体の景観は一定のルールの中でつくられていたと思いますが、現在は高層住宅が乱立して、千里全体や住区全体の景観への配慮は顧みられず、崩れてきています。多くの団地の建替えが同時に行われている時期だからこそ、新たな千里の景観のあり方を考え、生み出していくべきですが、結局はブロックごとでばらばらにデザインされていて、ブロック相互の調和のない町並みになってしまっています。少なくとも住区内の建物のデザインを相互に調整するような工夫が必要です。建物のデザインや色彩の考え方にある程度の方向性を持たせて、コントロールするために緩やかでもいいからデザインコード（地域景観の質を高めるための、個々の建物や建物周りの色彩・デザインに関するルール）が欲しい。新たな建物が建ってしまった後に、あの建物の色はちょっと派手だねといった感想を住民の方から聞くことがありますが、設計のある段階で模型をつくって、建物の色彩やデザインを住民も加わったデザイン会議にかけて、チェックするようなことが必要だと思います。

住民が千里のことを知る取り組み

豊中市の千里文化センター「コラボ」には市民実行委員会というボランティアグループがあって、市と協働しながらコラボでの市民交流の場づくりに取り組んでいます。市民交流のプロジェクトの一つとして市民参加の千里まち歩きを季節ごとに実施していて、私も実行委員としてまち案内を担当しています。千里ニュータウンには12の住区があり、隣接地にはニュータウンに囲まれて歴史ある上新田のまちがありますが、住民の方たちは自分が住んでいる住区以外を歩く機会が少なく、新たに引っ越してこられた住民の方たちも、どのようにしてまちができて、どんな歴史や暮らしの上に現在の千里ニュータウンがあるのかということを知る機会がなかなかありません。そのような中で、まずは千里ニュータウンのことを知って興味を持ってもらいたいということで、千里まち歩きを始めました。

千里を歩きますと、それぞれの住区のまちの形や道の形に工夫があることを発見します。たとえば、車に出会わない道が整備されているとか、昔の農業用の溜池が公園の池として活かされているとか、開発される前の土地の形や樹木があちらこちらに残っているとか…。まちの形の中に、開発前の千里丘陵の面影やニュータウン計画の特徴、あるいはまち開き後約50年間の暮らしの物語などが見て取れます。まちの風景の中であって日頃見過ごしている千里の個性をみんなで発見して楽しむことが、千里に住んでいる人たちが千里のまちや暮らしへの興味を持ち、千里に対する愛着や誇りを育むことへとつながっていけばと思っています。

住民の交流の場や機会の減少

集合住宅の建替えによって住民の交流の場がずいぶん削られています。府営住宅を例にとりますと、その多くは中庭を囲む形に住棟を配置する「囲み型配置」で団地が構成されていました。中庭は住民の目が子どもたちに行き届く遊び場であり、住民同士の日常的な交流の場になっていました。ママさんバレーのコートが住民の手でつくられた団地もありました。このような団地が高層住宅に建替えられると、駐車場設置の規則に従って、大きな面積を占める立体駐車場ができ、住民交流のための広場や遊び場が狭められてしまいます。

また、当初は階段で上り下りする4～5階建ての住棟が大半で、階段を介した路地のような8～10戸の付き合いがありました。お向さんが帰ってきたとか、今日は留守だとかがなんとなくわかり、近所同士で緩やかに見守っているという良さを持っていました。これが高層住宅になると、エレベーターで上がると廊下沿いに何戸もの住宅が並んでいて隣近所のまとまりが生まれにくく、近所づきあいが希薄になります。高齢化が進んでいるので、かつてのように子どもを介して近所づきあいをするということもない。このような状況の中で、高齢者の孤立化をどう防ぐかということが高層住宅の大きな問題です。

高層化による高齢者の孤立化という問題は分譲マンションも同じです。分譲マンションはセキュリティを重視して外部に対して閉じる形になっています。二重三重にオートロックが設けられていて、高齢者はそういうところに訪ねて行くことは億劫に感じますから、友だちづきあ

いが減って孤立しがちになります。

千里ニュータウンの魅力

第一の魅力は、立地です。千里丘陵にニュータウンが開発されたのは、大阪都心に近いことや、中国自動車道や名神高速道路といった日本の大動脈のルートに近接していたということがあります。さらに、空港や新幹線へのアクセスもいいので、全国どこにでも2時間で行くことができる便利なまちであると評価されていました。モノレールが開通してから交通の便は更に良くなりました。

二つ目の魅力は居住環境です。公共空間がゆったりと確保されていて道も広いし公園も多く、緑豊かであることが大きな魅力になっています。集合住宅の高層化について先ほど触れましたが、都心より建物周りの緑が豊かなので、高層化による圧迫感が緩和されています。

三つ目の魅力は歩いて暮らせるまちとして住区がつくられていることです。一つの住区が一つの小学校区になっていてまちがコンパクトですし、特に豊中市域の住区は車に出会わない歩行者専用道路がまちを巡る形に設けられていて、高齢者や子どもたちが安全に生活できるまちであると言えます。

ただし、身の回りの環境をいかに管理していくかという課題があります。たとえば、公園の緑があまりにも成長しすぎて、人の目が行き届かないところが多くなっていますので、豊かな公共空間をうまく管理していかないと、千里の魅力が失われていきます。また、幹線道路は広くて緑豊かではありますが、街路の賑わいや楽しさに欠けますので、このようなことの改善に

貢献するような団地建替えや再整備が必要です。

近隣センターの活用

商店街の魅力ということを考えますと、千里ニュータウン全体にもの足りなさを感じます。特に近隣センターは、商店街の店舗をすべて分譲してしまったことが現在の衰退の要因になっています。店舗の継続は持ち主の個人的事情に任せられ、また、商店街としてまとまって集客の努力をしたり、活性化に取り組もうという組織力に欠け、結局は空き店舗が増えていくという状況です。

しかし、まちの中心部の歩いて行けるところに商店街があることは、高齢化の進展や脱車社会を考えると、これからの時代にこそ価値を発揮する条件を備えていると思います。今後の近隣センターの再整備に当たっては、地域住民の利用者としての意見を大事にし、商店主と住民がともに商店街を盛り上げていくことが望まれます。

新千里東町の近隣センターにスーパーがありますが、生鮮食料品の価格が安く、お客さんのために経営努力をされています。隣の住区の新千里北町や古江台からも買い物に来られていますし、土曜日に開かれている朝市は多くの買い物客で賑わっています。特色を持たせてニーズを掴めば、近隣センターの商店もお客さんが集まるということです。

また、これからは近隣センター同士がうまく連携していくことも必要です。高齢者が遠くまで歩いて買い物に行くことは難しいので、近隣センターや医療センター、公共施設などをこま

めにネットワークするコミュニティバスを走らせれば、家から離れていても魅力ある近隣センターに出かける人が増えます。千里ニュータウン観光にも利用できるバスにすることも一案です。

近隣センターでの新しい動きを紹介します。若い人たちが集まる小さなレストランが近隣センターにでき始めていますが、建替えて若い居住者が増えてきたということが大きな理由だと思います。新千里南町の近隣センターにはイタリアンレストランができています。佐竹台の近隣センターのピザレストランは店の前に人が並ぶぐらい若い人に人気の店です。また、近隣センターではありませんが、桃山台近隣センター近くの医療センターでは医院が建替えられて医療ビルができました。このビルの1階に入っているレストランも、これまで千里になかったようなしゃれた店です。

もともと近隣センターは、住民が集まり、交流する場所としてつくられていますので、商店街と地区会館、広場がワンセットになっています。したがって、近隣センターの再生に当たっては、住区コミュニティの大切な交流拠点であることを再認識した上で、機能を見直していかなければなりません。

つまり、近隣センターに入る業種は商店でなくてもいい。たとえば高野台近隣センターでは、スーパーだったところを改修してグループホームにしていますが、このような高齢者支援施設を始めとして、地域の暮らしを支援するサービス業も必要です。さらに、地域の中で働くための場としての機能を持つことも必要になってきます。働く場といっても単に事務所をつくるということではなく、パソコンを使って家で仕事

をしている人たちが一人で仕事をするのではなく、集まって情報交換をしながら仕事ができるような共用のスペースです。このような場所をコワーキングスペース（Coworking Space）と呼びますが、最近は若い人たちに受け入れられて、全国で定着し始めています。そんな働き場所が近隣センターにあれば、子育て中のお母さんも地域の中で仕事をすることができます。

モノを売り買いするだけではなく、地域サービスや就業の場を加えていって、近隣センターをまちの賑わいの場所や情報が集まる場所として活かしていくことを考えなければなりません。

店舗については、もっと近隣センターを元気にする工夫が必要です。千里中央は家賃が高くて若い人が店を出すことは難しいけれども、近隣センターならば比較的安い家賃でチャレンジショップのような特色のある店がやれると思います。若い居住者が増えてきているので、そういう店を受け入れるような商店街の意識改革が必要です。

街角広場は地域交流の場であるだけでなく、高齢者や子どもたちを緩やかに見守る場で



新千里東町の近隣センターのスーパー

あり、地域の情報センターであり、ささやかではありますがコミュニティビジネスの場でもあります（千里絵葉書や千里竹の会の竹炭などの販売）。地域の人材を活用しながら、地域サービスや就業の場を生み出していくことを考えるにあたって、示唆に富む地域活動だと思っています。

地域自治の動き

新千里東町では現在、近隣センターの移転建替えが計画されています。住民にとって近隣センターはどうあるべきか、どんな業種に入ってほしいのか、地区会館に必要な機能はどういうものかといったことを、地域自治協議会が中心になって住民の意見を聞いてまとめたり、市と協議したりしています。以前でしたら、地域団体のある決まった方たちの間で話がまとめられるような場合もあったように思いますが、地域自治協議会ができ、50歳ぐらいの千里ニュータウン2世の会長さんの視野の広いリーダーシップで、住民に広く課題や議論の内容が知らされ、また、協議会を通じて誰もが意見を述べることができるようになりました。それに加えて、地域自治協議会には、若い住民の方たち、たとえば小学校のPTAの会長さんや東丘ダディーズクラブ（東丘小学校PTAのお父さんたちやそのOBの集まり）のメンバー、マンション自治会の役員といった方たちが参加するようになり、世代が違い、居住歴も異なる人たちが集まって、まちの課題を話し合う場として定着し始めています。このことは地域運営を活発化させる上でも、地域の良いところを共有し、活かしていく上でも大切なことです。近隣センター問題

など、課題としてはたいへん重いものがありますが、これまで活発ではなかった世代間交流が育ってきていることは、地域自治協議会導入の大きな成果だと言えます。

さらに、新千里東町の課題として、建替え後の新旧の居住者のつながりをどのように築き上げていくかということがあります。当初からの分譲マンションを建替えた場合は、もともとの居住者の方がおられますので、その方たちがつながりを新たな居住者の方にも広げていこうという努力をされます。しかし、府営住宅の敷地の一部が民間の開発業者に売られて分譲マンションが建てられたような場合は、ほとんどの居住者が転入者であるために地域とのつながりがなく、この方たちに地域に参加してもらうことは難しいことです。マンションの中には地域とあまり付きあわずに暮らしたいという人も多いようです。新旧住民のつながりづくりのためには、住民の誰にも共通する地域の課題を一緒に考える場が地域にあることが必要で、そういう意味でも近隣センターの問題について新旧住民がともに考え、意見を言えるような場としての地域自治協議会は、千里ニュータウンの地域自治の一つのエポックだと思います。

千里中央の課題

千里中央にあった文化施設がなくなりつつあり、これは千里の住民にとって大きなマイナスです。よみうり文化センターの建替えに伴ってまもなくホールがなくなりますし、セルシー地下の映画館はすでに閉館しました。新千里西町の業務地区にあった2つのホールもだいぶ前になくなっています。文化に触れる場が千里中央

から消えていくことは、魅力あるセンターとしての資源を失っているということです。

セルシーはレジャーセンターとして1972年にオープンしました。ボーリング場やプール、アスレチッククラブ、文化教室、ホールなどがあり、ホールでは定期的に寄席も開かれていました。千里中央は単なる商店街ではなく、スポーツや文化を通じて人と出会い、楽しむ場を備えたショッピングセンターとして計画されたのです。これからの千里中央をどのように再生、活性化しようかということを考えると、ホールやレジャーセンターに代わる新たな魅力を生み出さないと商業的にも沈滞化していくことになります。

千里中央の商業ゾーンの空間的な特徴は、ショッピングモールでつながる南北の大規模な広場です。この広場は、2階部分につくられた人工地盤です。しかし、この広場が商店街の活性化にうまく活用されてない。ひんぱんに地方観光物産展をやっていますが、周りの商店街と連携していません。商店街全体でこの大規模な広場を活かした使い方を生み出して、人を集めることがあっていいと思います。セルシー広場は、新人歌手のデビューの舞台として広く知られており、キャンペーンコンサートのときには広場がファンでいっぱいになります。このような知名度の高いイベントを核にして千里中央独自の文化的な催しを加えて、商店街全体で人を呼ぶことが考えられるべきです。

もう一つもったいないと思うことがあります。千里中央は大阪空港を利用する全国からのビジネスマンや旅行者が大阪都心へ向かうための鉄道の乗り換え場所なのですが、このことが活かされていません。乗り換えをする人の流れ

は結構多いのですが、この人たちを商店街へと取り込むような努力はなされていません。また、千里中央が日本で最初のニュータウンの中心的なセンターであることも案内していない。もっと千里中央をPRし、千里中央周辺の新千里西町のビジネス街や新千里東町や西町の公園、遊歩道をも含めた千里中央一帯の魅力を駅や商店街で紹介すれば、全国からも千里中央に人を集めることができると思います。

千里のこれからを担うひとづくり

千里文化センター市民実行委員会では、年齢や居住歴、住んでいる地域を超えた実行委員とサポーターが協力し合って、文化センターでの市民交流の催しなどを企画し運営しています。市民交流の場づくりが第一の目的ですが、交流の場づくりに携わることを通じて、千里ニュータウンの市民交流の担い手を育てようという狙いもあります。

一方、それぞれの住区を見ますと、たとえば新千里南町3丁目の景観協定づくりやその普及活動のように、地域環境や暮らしに根差した課題を住民がともに考える場を設けて解決していくような新たな動きが見られ、このことが地域を担う人づくりのきっかけになっています。新千里東町の地域自治協議会もそのような動きの一つです。新千里北町でも地域自治協議会が今年の4月に設立されました。新千里北町の地域自治協議会の方たちのお話を聞きに行ったことがあります。かつて千里第1世代が運営していたお祭りや運動会を、子どもであった第2世代がいかに楽しみにしていたかといった懐かしい話の中から、つぎは、第2世代がその楽しさ

を子どもたちに伝えていかなければという話になりました。このように地域のことを語り継ぐことが地域の担い手づくりにつながっていくのだらうと感じました。

以前、新千里東町の東丘ダディーズクラブが主催し、千里グッズの会がお手伝いをして、子どもたちを対象にした新千里東町を巡るまち歩きをやったことがあります。タイトルは、「いにしえ街歩き東町昔遊びツアー」でした。千里第2世代のお父さんたちが、子どもの頃遊んだ場所を案内し、ビー弾（ビー玉遊び）や缶けり子どもたちに教えながらまち歩きをしました。お父さんたちは、子どもたちに自分たちが体験してきたことを伝えつつ、自分たちもまた育ってきた環境やコミュニティを振り返り、再確認したのだらうと思います。千里文化センターのまち歩きにも言えますが、いろんな人がともにまちを歩いて思いを述べ合うことも、長い目で見ると地域を担う人づくりにつながると思います。

行政と住民の関係

地域づくりは、行政と住民との間の協働と役割分担が大事だと思います。行政はどうしてもそれぞれの部署の専門領域の視点からまちを見ます。しかし、住民は生活者として複合的、横断的な見方でまちや暮らしを捉えます。そうすると、住民が問題だと感じることの解決に向けては、往々にして行政の組織の複数の部署にまたがりますので、住民側からすると行政とのやりとりはたいへんなエネルギーがいらいます。このようなことを考えますと、行政側と住民側の双方に総合的にまちを捉える担当グループが必



要であり、公民のグループが連携して、行政のどのような部署に課題解決に参加してもらうかを調整することが必要になります。豊中市にはコミュニティ政策室という部署がありますので、ここが総合的な視点を持った行政側の調整役や公民のパイプ役として、より一層の力を発揮していただければと思います。

地域の公共空間の管理・運営については、行政が担っていることで住民が肩代わりできることや、住民が担ったほうが地域運営がスムーズにいくようなことは地域に任せ、地域の環境維持・改善を公民で分担して進めることが必要です。千里ではこのようなことが少しずつ定着してきています。その代表的な例は、千里竹の会による東町公園の竹林の整備です。ただし、地域の複数の団体が異なった分野で環境改善の役割を担う場合には、先ほど言ったような地域運営の総合的な視点から個々の活動を統括・調整する組織がないと、せっかくの活動がバラバラになって、まち全体で見ると方向性のない環境整備になってしまいます。

新千里東町で活動している千里竹の会やアジサイを咲かせる会、新千里西町のダンボラ（男性による清掃ボランティア）、新千里南町のわんわんパトロール（犬の散歩を兼ねたまちのパトロール隊）、といった多様な地域活動が根付いてきています。このような住民のやりがいに結びつく地域活動を進めながら、千里ニュータウンや住区の運営という大きな視点に立って地域と行政とが協働し、千里ニュータウンを暮らしやすいまちに育てていくことが大事です。